本興寺だより

令和五年
三　月
第二四三号

「諸の悪趣、地獄鬼畜生、生老病死の苦、以て漸く悉く滅せしむ。真観清浄観、広大智慧観、悲観及び慈観あり。常に願い常に瞻仰すべし」

（法華経観世音菩薩品第二十五）

唱歌に「春が来た　春が来た　どこに来た　山に来た　里に来た　野にも来た」とあります。

花も咲き、鳥も鳴き、長く待ち望んだ春の到来の喜びを素直に表した歌です。春を人生に例えるならば青春です。青春を惜しんだ心境が、春の移ろう時を惜しむのと通じるものがあるのかもしれません。

人生も四季があります。肉体も精神も。辛さや悲しみを体験しなければならない試練の冬も何度もあります。

先月トルコ大地震があり大きな犠牲者が出ていますが、三月十一日は、平成二十三年の東日本大震災で亡くなられた人の第十三回忌に当たります。死者二万人、未だに行方不明の方が三千人おられます。

亡き御霊への丁重なるご供養と、家族の、今も姿なき御霊と共に寄り添って生きているという気持ちを忘れないことが、御霊の無念さを和らげ、安らぎが得られてくることになるのです。

人の命は過去・現在・未来に繋がって生きています。

ご先祖の御霊の沈黙の声・想いに寄り添う生き方が大事だと仏様は教えています。

以前夜遅くお電話があり、お話を聞くと、この震災の津波で幼いお子さんを亡くされ、まだ見つからないとのことでした。突然の不幸で心が折れ、それでも気持ちを何とか克服して何年か過ごしてこられたのですが、突然フラッシュバックが起こり、その記憶が鮮明に思い出され、無念さと後悔で心が苛まれたのです。辛い現実をなかなか受け入れられない深い悲しみがあります。

災難に遭わずに平凡に日々生きられること自体が本当に有難いことだと改めて感じます。ウクライナでの戦乱の中で懸命に生きている人を見ても同様に思います。

仏様は、人は何事もまず自分の現状を、たとえ満たされていなくても素直に認め、受け入れ、感謝できる部分があると気付く心を持つことから、その後の運命が開かれて来ると云われます。

仏の使いである観世音菩薩は、冒頭の文のように、私達が生きる上で、様々な悪に包まれて、地獄と餓鬼、畜生の世界に心が居ようとも、生老病死の苦しみから救って、消滅させることができると云われています。と同時に人々がそのように生きられる方途を示されています。

①には「真観清浄観」（しんかんしょうじょうかん）です。真観とは、真実のことを見極める力です。人間とはどういうものか。社会とは・・・、天地自然とはどういうものなのか？

それが本当に分かれば、人は頼まれても悪事はできないのだと云われます。あらゆる物の実相＝真相＝真観を求め、知ることが第一だと云われます。

そのためには、「清浄観」＝自己に対する過度の欲、執着、煩悩を離れる心を持つことが大切であると。

他人と共に、社会と共に、自然と共に生きて、生かされている自分の命を強く感じられる時、人は清浄な心になれると云われます。

観世音菩薩は世の音を観ると書きます。世の中にはいろいろな音や声が発せられています。山鳴り、海鳴りなど自然界の音、社会生活での騒音、振動、人との会話など。人間は自分の考え、信念に基づき、無意識に見たいものしか見えない、聞きたいものしか聞こえないことが多いのです。音は普通は聞く、聞こえると云います。何故音を観ると云われるのか？人は自分に都合の良い言葉、心地よい言葉はしっかり聞き、そちらへ向いて観て相対します。しかし耳障りな声は聞いても聞こえてなくて顔をそらして聞き流すことも多いのです。真剣に向き合いません。

そういう自己の感情に固執した心を捨てて、聞いたことと素直に向き合い、そのことを単に見るだけでなく、意図的に観る（見つめる）ことが大事なのです。

人は本当に気持ちが滅入った時は、その気持ちは言葉にもならず、しゃべる気にもなりません。そういう沈黙の心の音をも仏様は観て、力を下さるのです。

②「広大智慧観」とは、広く大きな智慧。ただ物事を知り正しく処理する知恵ではなく、自分と他人の区別を超えて平等に感じ命の本質を知り助け合う智慧です。

③「悲観及び慈観」とは、他人の苦しみ悲しみを自らのものとして共感できる心である悲観と、他人の楽しみ喜びを共に観じられる慈観の心です。

自分も観世音菩薩のような境涯になりたいと常に願い、常に仰いで信じ、その行いを学ぶ中で、世間で受ける災難や苦難に挫折せず、それに打ち勝ち、乗り越える力を持つことができると仏様は教えています。

観世音菩薩（観音様）は、法華経の真実さと清浄さを身をもって示し、深い智慧と慈悲を注いで救いを差し伸べられる菩薩です。

春の到来と共に草木の新芽の膨らみが大きくなってきます。

心の在り様によって人は苦悩に陥ります。

しかし心も四季の如く変化します。

冷たく感じる冬の後には必ず暖かい希望の春がきます。心の持ち方は単に気休めではないのです。自分の心持ちに応じた境遇が集まって来るのだということです。

どんな時でも心に春の暖かさと希望を失わず、智慧と慈悲の心で人と接していきたいものです。　合掌

本興寺住職　中谷　聰秀